国際演劇交流セミナー 2016

International Theater Exchange Seminar 2016

ごあいさつ

一般社団法人日本演出者協会 理事長
流山児祥

1990年代より近隣の韓国、中国の演劇人との交流、さらには東アジアの国々との演劇交流を日本演出者協会は重ねてきました。また、1999年からは文化庁による本格助成のもと『国際演劇交流セミナー』を通年で開催するようになり、世界各国の演劇人を講師として、ワークショップ、レクチャー、シンポジウム、リーディング等を連続的に開催しています。
『国際演劇交流セミナー』は、前理事長和田喜夫（当時事務局長）と一緒に立ち上げ、現在まで17年間開催されている協会のメイン事業の1つです。この事業を立ち上げた動機は「世界の同時代演劇をもっと知りたい」というわたしたち演劇人の根源的な衝動からでした。世界の《身近な他者》との「出会い」を求めて始めた事業です。

『国際演劇交流セミナー』は17年間にわたって韓国、中国、台湾、アジアの国々、カナダ、オーストラリア、東欧、北欧、アフリカといった60か国以上の国々の演劇人と交流し深く学ぶ機会を継続中です。当初から欧米中心の企画ではなく、日本で余り知られていない様々な国々との交流・紹介を目指しました。なぜなら、世界には多様な演劇が存在しているからです。世界の多様な「現在」を、演劇を通して知り他者と交流する、それが『国際演劇セミナー』なのです。

これで140回60か国近い国の演劇人との『国際演劇交流セミナー』を実施したことになります。招聘した講師の多くは各国の優れた劇作家、演出家、俳優、舞台美術家、演劇教育者などです。そんな演劇人の言葉がずっしり詰まった 201 6年度の年艦です。この年鑑が、日本の演劇人にとって素敵な「世界」との「出会いの書」になれば幸いです。

すぐ隣の国にいる《身近な他者》との出会いの中に演劇は豊かに存在しています。パレスチナの友人が語るように「演劇は社会にとって必要不可欠なモノ」なのです。そんな《身近な他者》の熱いメッセージをあなたに届けます。世界には、いろんな演劇があるのです。この年鑑で「いろんな演劇」との素敵な出会いがあなたに生まれることを願っています。ありがとう！

韓　国　特　集

【INTRODUCTION】

底辺に生きる家族の姿を通して、韓国の近現代史および社会の歪みを描き、常に韓国現代演劇を牽引する劇作家・演出家パク・クニョン本人の演出で代表作「青春礼讃」の世界を体験し、韓国演劇の今を訊く！

企画：和田喜夫

今回の韓国特集は、2014年に始めた“ 海外の戯曲を劇作家自身に演出してもらう ”という企画の第3回目となります。この企画を考えた理由は、《日本語に翻訳された戯曲から受ける日本の演劇人の印象と、作者自身が考えたことがしばしば異なることがあり、同時代に生きているのだから直接出会うことでその問題を解決したい》と考えたからでした。

今回の講師としてお願いしたパク・クニョン氏の戯曲『青春礼讃』との出会いは、2005年に翻訳家の石川樹里さんとソウルでお会いした時です。“ ぜひ読んで欲しい戯曲 ”として頂きました。石川さんはパクさんの戯曲を全て翻訳する予定だとお聞きしました。タイトルから受け取る印象と真逆の内容に新鮮なショックを受け、幾人かの演出家に紹介しました。

その後、2009年に“ 第1回日韓演劇フェスティバル ”を企画した時には、ぜひ誰か上演しないかと提案しましたが実現できませんでした。企画代表の自分が演出するという可能性もありましたが、演出できるという自信が持てず、そのままパクさんとお会いすることも無く、何か申し訳ないような気持ちのままずるずると10年の月日が経ちました。しかし心の中には、この戯曲と、そして作者ときちんと出会いたいという気持ちが続いていました。

2016年度の講師にぜひパク・クニョンさんにお願いしたいと思った理由は、2015年に閉館した新宿の劇場タイニイアリス企画のアリスフェスティバル最終公演でパクさんの劇団コルモッキルの公演『満州戦線 - 私たちが夢みた国』に衝撃を受けたからでした。昭和18年の満州を舞台にした、痛烈な笑いと問いかけの喜劇でした。この機を逃してはならないと直感し、終演後にすでに酔っていたパクさんにお願いし、その場で決定することが出来ました。

この作品は、特に読んだ印象と上演を観ての印象が異なるようです。それこそがパクさんの劇作の特長であり、そのありかたの中にパクさんの演劇を行う動機や思いが含まれていると思います。“ いわゆる演劇らしさを疑う ”ことの重要性が今回のセミナーでは常に語られていたように思います。「演劇は最下層から考えるもの。最下層から生まれる」という言葉が最もパクさんの反骨の精神と願いと愛情を表しているように感じています。

この企画のセミナーを実施することで、参加者だけでなく私自身にとっても実に大きな収穫がありました。今回もパク・クニョンさんが『青春礼讃』を生み出した動機、書かれた出来事の背景、台詞の細部に込められた思い、などを細やかに話して下さいました。演劇だけでなく社会を語り合うための言葉が溢れています。一読していただけると幸甚です。

【 in 東　京 】

2016 年 8 月 18 日(木) ～ 21 日(日)、24 日(水)　会　場：芸能花伝舎

日本大学芸術学部江古田校舎北棟
中ホール、第5実習室

【 in 松　山 】

2016 年 8 月 25 日(木)～ 28日(日)　　会　場：シアターねこ

■ 8 月 18 日（木）18：30 ～ 21：30　会場　芸能花伝舎
■ 8 月 25 日（木）19：00 ～ 21：30　　会場　シアターねこ（松山）
パク・クニョンによるレクチャー　講師　パク・クニョン　通訳　洪明花／　進行　和田喜夫

- □ 生い立ち
- □ 劇団を訪ねる
- □ 俳優になるべき人間とは
- □ 演出家としてのスタート
- □ 劇作家ちしてのスタートと家族への回帰
- □ 76団
- □ 『青春礼讃』（翻訳 石川樹里）
- □ 執筆のきっかけ
- □ ユン・ジェムンのこと
- □ パク・クニョンの演出方法論

■ 8 月 19 日（金）18：30 ～ 21：30　会場　芸能花伝舎
■ 8 月 26 日（金）19：00 ～ 22：00　　会場　シアターねこ（松山）
ワークショップ１日目　講師　パク・クニョン　通訳　洪明花

- □ 観客が最優先
- □ 登場しない人物を演じる
- □ 自分の悩みを含めた自己紹介
  （参加者全員が自己紹介をする）
- □ 美男美女でなくても俳優になれる
  自分を知る
- □ やらなければならないことはない
- □ 愛はすべての人が持つ
  愛があれば方法は問題ではない
- □ 町が学校
- □ すべての方言を話すべき

■ 8 月 20 日（土）18：30 ～ 21：30　会場　芸能花伝舎
■ 8 月 27 日（土）13：00 ～ 21：00　　会場　シアターねこ（松山）
ワークショップ２日目　講師　パク・クニョン　通訳　洪明花

- □ 試演と批評
  （グループごとの上演（4チーム））
- □ そのままの自分で演じる
- □ 観客に対して心を隠す
- □ 自分自身から始めるべき
- □ 誰でも、すべての役ができる
- □ 笑う演技

■ 8 月 21 日（日）13：30 ～ 18：00　会場　芸能花伝舎
■ 8 月 28 日（日）10：00 ～ 17：00　　会場　シアターねこ（松山）
ワークショップ３日目　講師　パク・クニョン　通訳　洪明花

- □ ののしり言葉について
- □ 独白について　普段から詩集を
- □ アドリブはやむをえず出るもの
- □ この課題の意味

■ 8 月 24 日（水）18：30 ～ 21：30　会場　日本大学芸術学部江古田校舎北棟・中ホール、第5実習室
日大特別レクチャー　講師　パク・クニョン　通訳　洪明花　／　進行　和田喜夫

- □ 恵化洞一番地
- □ 日本との交流
- □ はじめてのワークショップ
- □ 青森との縁
- □ 熊谷対世志さんのこと
- □ 「満州戦線」の映像を見る

パク・クニョン / 박근형 / 朴根亨 /PARK KUN HYUNG

1963 年 8 月 11 日、ソウル生まれ。劇作家・演出家。劇団コルモッキル芸術監督。韓国芸術総合学校演劇院演出科教授。1985年 劇団 76 団に俳優として入団、その後演出家に転向。2003年 劇団コルモッキルを旗揚げ。以来、韓国を代表する劇作家・演出家として劇団内外にて幅広く活躍。 1999 年に初演した『青春礼讃』で韓国内の演劇賞である演劇協会新人演出賞、作品賞や、文化観光部・韓国演劇協会選定「最優秀公演ベスト５」（作品賞、演出賞）、韓国評論家協会「今年の演劇」（最優秀作品賞）、今日の若き芸術家賞（文化観光部長官賞）、百想芸術大賞（戯曲賞）、東亜演劇賞（作品賞、戯曲賞）などを受賞。その後も多くの作品で数々の演劇賞を受賞するなど、韓国で現在もっとも注目される劇作家・演出家の１人である。代表作に、『鼠』『青春礼讃』『代代孫孫』『ギョンスク・ギョンスクの父』『そんなに驚くな』『満州戦線』など。

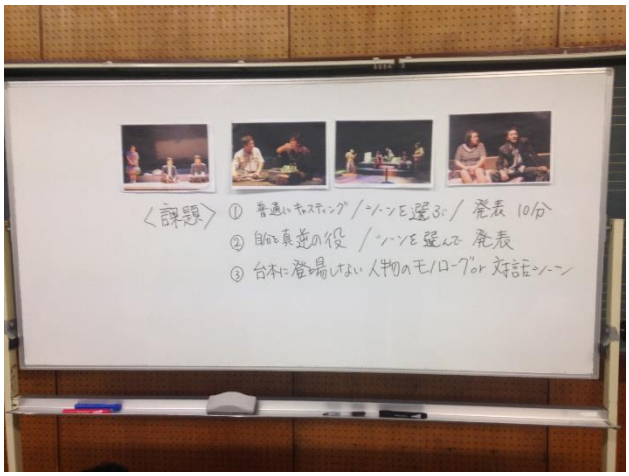
1日目　2016年8月18日（木）18：30 ～ 21：30　会場：芸能花伝舎

パク・クニョンによるレクチャー

○和田

国際セミナーは 1999年に始めました。日本にいると海外の現代劇に触れる機会がほんとうにありません。個人で行ってもなかなか出会えないし、お金もかかる。韓国特集は1999年から毎年おこなっています。いろいろな劇作家の方に来ていただいて、戯曲のリーディングをやったりしています。日本と韓国は近いのですが、俳優は非常に違います。韓国の方はとても強い。韓国の方は発散型で、日本は内省型だと言われます。その点も含めて直接お聞きするとか、作家本人が自分の作品を演出するとき、どのように演出しているのか。そうしたことを訊く機会を設けたいと思いました。

明日から『青春礼讃』を使ったワークショップを行いますが、今日はまず、どんなふうに劇団を作られたのかとか、どんな稽古をされているのかとか、そういったことを話していただこうと思っています。



この戯曲は約10年前に翻訳をいただきまして、読んで「うわ、こんな本があるのか！」と思いました。この戯曲にふれてから今日まで10年間、セミナー、ワークショップをやっていただきたいと思いながら、なかなか実現できませんでしたが、今年やっと東京と松山で行えることになりました。では、パク・クニョンさんに登壇していただきます。

○パク

私は韓国のコルモッキルという劇団に所属して演劇活動を行っているパク・クニョンと申します。今回、日本演出者協会に呼んでいただき、専門家の方々も多数いらっしゃる皆さんの前でこうしてお話させていただくことを、とても光栄に思っています。

今日は鄭義信さん、タイニイアリスの西村博子さんも来ていただき……私はお酒を飲まないと寝られないのですが、その私が昨晩はお酒を飲めませんでした。

和田さんがご紹介くださったように、私が所属するコルモッキルという劇団での演劇の作り方、また今回テキストになっている『青春礼讃』をどうやって作り上げていったかといったことから話をさせていただければと思います。

でも、その前に、私と演劇の出会いから今に至るまでをお話します。分量的にはその話のほうが多いかもしれません。

■生い立ち

私は 1963 年生まれです。日本もそうかと思いますが、韓国も戦争が終わったあとベビー・ブームの時代がありました。私は韓国のベビー・ブームの最後の世代だと思います。私のあとからは人口抑制のために政府が「子どもは2人まで」という政策を実施しました。それはその後「ひとりっ子」政策に転換しました。なぜこの話をしたかというと、私の家は姉が3人で私は末っ子です。母は1924年、父は1919年生まれです。私は末っ子なので両親はずいぶん年配でした。小学校時代、友だちの両親より私の両親は年寄りで、それを冷やかされたりして恥ずかしかったです。

日本はわかりませんが…当時、小学校入学時に身上調査があり、電話は自分の家のものか？家は持ち家か？ 小鳥を飼っているか？などを聞かれました。その項目の中に両親の学歴がありました。それで姉たちに聞きました。すると姉たちは返答にすごく悩んだ末に、小学校卒業だと教えてくれました。その後、中学校で同様の調査があったときにまた尋ねると、中学中退だと言いました…それで私は高校に入るともう質問はせずに、両親は高校中退ということにしました。私の進学とともに両親の学歴も上がったのです。学校でそうしたことを言うのは恥ずかしかったです。

両親はハングルの読み書きが出来ません。私はそんな両親が学校に来るのも恥ずかしい、友達が自分の家に来るのも恥ずかしい、良い家でもないし、教養のない両親だということをみんなに知られるのがすごく恥ずかしいと思っていました。

韓国では女性が姉を呼ぶときはオンニ、男性が姉を呼ぶときはヌナと言います。ですが、私は家で姉たちをオンニと呼んでいました。それで学校でも姉のことをそう呼んで、すごく馬鹿にされたことがあります。姉が3人、父は年が離れており、男の私は末っ子で、男に対して距離がありました。男にふれる機会が少なかったのです。それで、男の友達たちがキャンプに行くというと、いつでもどこでもついて行きました。

日本も同じかもしれませんが、韓国ではひとり息子はすごく可愛がられます。ビニールハウスで育てるように、大切にされます。ですから、私がキャンプに行くというと、母親が、夏のキャンプは水が危ないから行ってはだめ、冬は冬山が危ないから行ってはだめ… 可愛がられるあまり、何もできないのです。

母は咸鏡道（ハムギョンド：北朝鮮北東部）、父は平安道（ピョンアンド：北朝鮮北西部）の生まれです。咸鏡道の人間は、何事も厳しく一生懸命です。戦争の時に家から逃げる際、みんな家の荷物を持てるだけ持って逃げますが、母はそのとき自分の持っている貴金属をすべて売り、米を買ったのです。それで避難のために汽車に乗ったのですが、汽車は水や石炭の補給のためにときどき停車します。その時間に母は、停車地の近所の家の厨房を借りて、そこで米を炊いて、それで商売をしました。そのぐらいパワフルなのです。ブレヒトの肝っ玉おっ母のようです。

中学校、高等学校では制服なわけですが、母は私にものすごく大きな制服を買いました。どうせ大きくなると思ってです。だから私は高校卒業まで制服のサイズが合っていたことは一度もないのです。それで高校を卒業する前に私が思っていたのは、どうしたら自分がこの家を抜けだしてやりたいことをやれるのか？ということでした。母が嫌いだとか仲が悪いとかいうことではないのですが、青年期のそういう思いを持っていたのです。

私は勉強が出来なかったので大学にも行きませんでした。もし自分が勉強が出来て大学に行けるなら記者になりたいと思っていました。しかし大学には行けなかったので、漠然と、演劇をやってみようと思ったのです。それま

で演劇にふれたことはほぼありません。見たことがあるのは教会でやっている聖劇程度でした。もちろん戯曲を読んだこともまったくありませんでした。

■劇団を訪ねる

その頃、私は演劇というのは放浪するものだと思っていました。それで、いろいろな所を放浪するのが自分には良いのではと思ったのです。私は制服を着たまま、いろいろな劇団、集団を訪ねて行きました。行った先々の人々はみな「またおいで」と言ってくれましたが、それは、よれよれでブカブカの制服を着た私を見て「どうせ無理だろう。まあいいから帰りなさい」という意味だったのだと思います。それでも、あきらめずにいろいろ訪ねて行くなかで、新聞で、基礎訓練を受けられる研究生募集の広告を見ました。1982年だったと思いますが、3万ウォンを出して、そこに入れてもらうことになりました。それでウキウキしていたら連絡が来て、お金を払い戻すので取りに来いと言うのです。結局、申し込んだのが私ひとりだったのです。私は「大丈夫です。勉強をさせてもらえなくても、掃除をしたり、皆さんに迷惑のかからないように、ここにいさせてもらえるだけで結構です」とねばったのですが、やはり一人のためでも先生を呼んでこなければいけなくなるので、今回はあきらめてくれとのことでした。

私は何か夢を持っているわけでもなし、どうしたものかと思っていました。ところが少しして、また募集すると連絡が来ました。それで十数人とともに、やっと劇団員になりました。

入団はしたものの、私は何も知りませんでした。演出のことも、スタッフ・ワークのことも、何もわからなくてただボーッと座っていました。朝、稽古場に行き、読み合せがあるからそれを見て、ご飯を作り、稽古をします。ある時は公演のポスターを貼ったり、チラシを配ったり、本番ではスタッフ・ワークをするという生活を続けていました。

ですが、私自身に「これをやりたい」というものがなかったからか、すごく楽しかったのです。朝からいろいろな人々、兄貴分、先輩たちに会い、チラシを配って、芝居小屋に入って…　そんな生活がとても楽しかったです。先輩たちの中には家に帰らずに、劇場でそのまま寝る人たちもいました。私もそうした先輩たちの横に寝て話を聞き、家には帰らなくてよくて、とても楽しかったです。

朝、劇団に行き、台本をもらって読み合せをしたり稽古をしたりしていくうち、私はとくに上手いわけでもありませんでしたが、先輩たちから、「なかなか演技が素直だから、そのままやっていれば上手い俳優になれるよ。がんばりなさい」と言ってもらったりしたのですが、私自身は俳優になることに関心がなかったのです。

■俳優になるべき人間とは

ある日、地下の劇場の真っ暗な空間で先輩に質問しました。「なぜ演劇を始めたのですか？演劇とは何ですか？」その先輩は一時間くらいとても素晴らしい説明をしてくれました。「演劇というのは人間の誕生とともに…そして天に向かって祭祀を行うこととともに発展し…音楽、踊り、歌…そしてシェイクスピアが生まれ…神と神のめぐり合い、人間と人間のめぐり合い…」それで私は聞きました。「最高の演劇は誰の何ですか？」先輩の答はハロルド・ピンターの『バースデイ・パーティー』でした。

大好きな先輩が薦めてくれた最高の戯曲ですから、さっそく探して読んだのですが意味が分かりませんでした。それでも先輩が最高だというので、がんばって最後まで読みました。で、ある夜、雑魚寝をしていたら、何か声が聞こえてきました。私が自分が寝ているソファから様子を見ると、真っ暗な舞台に誰かが立って、何かセリフを言っていました。それはキム・ガプスという先輩でした。それで分かりました。俳優は誰がやっても構わない仕事ではないと。その思いは今も変わりません。まずは、何よりも、誠実でなければならない。もちろん、その先輩が明け方からひとり起き出してセリフの勉強をしているというだけで誠実とは言えるわけではありませんが、自分の稽古に生活のすべてをかけられる人間だけが俳優をすべきなのだと思いました。

人間にとって思考は大切です。たとえば、ある俳優がドナルド・トランプのような思考を持っていたら…　まあ、これはその後になってから私が得た考えですが…その俳優が持っている精神世界が少なからず影響を与えてし

まうというものは必ずあって、それがドナルド・トランプのようなものだったらどうなるのだろう…？ やはり、精神世界が… ある程度、常識を持っていないといけないのではないかと思いました。

キム・ガプス先輩が夜中に稽古している姿を見て、俳優は自分の仕事にすべてをかけて誠実でなければならないと思いました。もともと自分は俳優をやりたかったわけではないのですが、俳優は誰でもやって良い仕事というわけではないとあらためて感じて、自分のような者はやってはいけないと反省しました。つらかったです。

■演出家としてのスタート

とはいえ、劇団生活は続けました。チラシを配ったり…先輩の薦めてくれたピンターの「バースデイ・パーティー」を読んだり…ところが、同じようにチラシを配っている仲間を見ると、カバンの中に戯曲など勉強するためのものが入っていないのです。彼らに対して私は「お前はなんだ。何も持ち歩かないで。俺がお前だったら、とっとと田舎に帰る。何がしたいんだ？」と、ひどい言葉を言いました。

私たちはポスター張りのアルバイトのような形で、自分の劇団の公演だけでなく、ほかの音楽会などさまざまなポスターを貼ることで、1枚いくらというお金をもらっていました。その時、同僚に提案しました。お金をもらわないでおこう。お金の代わりに、その人たちの持っている劇場が空いている日に無料で貸してもらえないか聞いてみようと言いました。私が望んだわけでもないのですが、そういう形で私が言いだしっぺだったので、そうやって借りた劇場での公演を私が演出するようになっていきました。といっても、私自身が演劇教育を受けていないので演出のことがわかっているわけではないのですが、見ることで勉強しようと思いました。一年に100本は必ず見て、そうしているうちに何となく自分の中に演劇というものが入って来て、自分の持っている演劇のリズムが出て来ました。

しかしそのうちに問題が起きました。たとえば翻訳劇の翻訳者や劇作家に上演許可を求めても了解してくれないのです。それでどうしようかと思い、書ける人を連れて来ようということになりました。私には書く力もないし、そういう勉強はしていないので、私が友達に「こうしたい。ああしたい」と伝えながら、それを書き起こしてもらいました。

しかし、そうやって公演を続けるうち、だんだんお互いに、劇作と演出の間にズレ、不満が生じてきて、最後は彼と別れました。

■劇作家としてのスタートと家族への回帰

それで結論として「では自分で書こう。」と思うようになりました。いろいろなパターンとか、自分が持っている傾向を表現していって、あとは稽古場で俳優と一緒にふくらましていけばいいと考えました。もちろん俳優たちは気に入らなかったと思います。基礎もない奴が台本を書くなんて…というのがあったと思いますが、私自身は、演劇には「こうしなければならない」という様式や方法などはないのではないか？と思っています。それだけを信じて、それだけを自分の自信としてやってきました。

自分が女性優勢な家族で育ったため、男に出会いたい、兄貴たちに出会いたいということがあり、もちろん無学だったのですが、年老いた両親から離れて、兄貴たちの男の世界に飛び込んでいった、そこが演劇でした。そこでいろいろなことを学んで、もともとは両親から離れたいと思って演劇に行ったのに、そういう兄貴たちの生きざまを見ているうちに、自分の親はどうだったんだろう？自分の家族はどういうものなんだろう？と、ようやく考えるようになりました。そうした事をこれまで考えてこなかったことに、とても恥ずかしさを感じました。父が死んで、そのあと母を通して、父がどんな人だったか、どんな人生を歩んだのかという話を聞くようになりました。

目に焼き付いた小さい頃の光景…たとえば母がチマ・チョゴリを着て父と出かけていく…そういう光景が目に浮かんだりするとき、その時の父の心情、母の心情はどんなものだったのだろう？というようなこと。自分が台本を書き始めたとき、わからなくなったり、セリフや状況をどうするか考えに詰まったりしたときに必ず思い出すのが、そういうことです。

■　　76 団

私が入った劇団は76団と言いました。1976年に出来た劇団です。そこのキ・グクソ先生や、先ほども言った兄貴たちとの出会い、自分の思春期はそこにあったと思います。そこで世界とか演劇に気づけた…まだまだ成熟してはいませんでしたが…そこで気づけたのだと思っています。

エピソードがあります。その劇団の人たちは「さあ稽古するぞ」と集まるのに稽古をしません。とりあえず酒を飲むところから始めます。稽古をしないで社会の話、文化、哲学の話などを滔々と話し、その挙句にケンカが始まります。私は下っ端なので、すみで小さくなって見ています。それで、みんなで「こんなにケンカしていたら稽古にならないから、仲直りの酒を飲みに行こう」と出かけます。それから「悪かったな。いや、こちらこそ。後輩たちも一杯いこう…」と飲みながら、またケンカになります。そして和解して、次の店に行きます。またケンカします…そして翌日また集まります。そして和解して、仲直りに一杯…演劇をやるはずなのに演劇の話は本当にせずに、政治、人間の価値、それぞれの美学について語り合い、「お前、本物か？」みたいなことでまたケンカ。

これは私にはショックでした。

その人たちは、それが演劇だと思っているのです。私は演劇とは、登場人物がいて、その人物には情緒があり、どんなセリフを言うのかが重要だと思っていたのですが…重要かもしれませんが…それよりも、人々が生きている現在の現実の世界、今日いまこの瞬間を真摯に戦う力こそが演劇だと彼らは考えていました。人が生きているこの時代を語り、描くことが演劇なのだと、私は思うようになりました。その先輩たちは普通に生活しながら、「ああ、あんな演劇が作りたい」というようなことも言うのです。

私は自分が演劇をやるために生まれてきたとは思っていません。両親から生まれて、生きていく中で演劇に出会って、いま演劇をやっているのだと思っています。

■『青春礼讃』

『青春礼讃』について話したいと思います。

1999年の作品です。結論的なことから言えば、この作品は「はたして価値のない人生などというものがあるのか？」「ある人の人生には価値があり、別の人の人生に価値がないなどということがあるのか？」という質問がテーマです。

演劇をすることは誰にとってもしんどいものです。私は今は、経済的なことなどもろもろ、当時よりは良い状態になってきていますが、当時は、がんばって作品を作っても何の反応もないし、家に帰ると…母が生きていた頃ですが…母親に当たったり、ひどい時は、ののしってりして、そうしながらも心はすごくつらい。ある時は、そんな事をしてしまう自分がいやで、トイレに隠れてとめどなく泣いたりしていました。

そんな風に、つらさから母に当たる自分がいたのですが、生意気にもこんな風に考えました。他人に対してひどい事を言ったり当たったりすることは、実は愛情がないからするのではなく、愛情をどう表現していいかわからずに、そういう行動になってしまっているのではないだろうか？

『青春礼讃』の登場人物は、落第ばかりしている高校生とか、学生たちに人間とは何か、生きるとはこういうことだと教えたいのにうまく伝えられない教師とか、父親が刑務所に入っていることを隠して幸せなフリをする学生とか、癲癇(てんかん)という持病があるためにうまく生きていけない女の子とか、そういう人たちが登場します。それから何もしない、何もできないで妻からお金をもらってばかりの夫、その夫のせいで失明してマッサージの仕事をやりながら金をせびられるたびに渡してしまう妻が出て来ます。現実にはここまで悪いシチュエーションはないと思います。あくまで虚構です。この作品は最後まで希望が見えない、泥の中にはまってしまった家族の話です。

■執筆のきっかけ

この作品のきっかけとなったものがあります。いちばんのきっかけは、ある韓国の女優です。ある俳優が彼女の

ことを追いかけていました。それでその女優が私に助けを求めました。私はその俳優と女優を連れて飲み屋に行きました。そして私は、その二人に「会話をしなさい。暴力が出そうになったら、それは私は止めるが、それ以外は干渉しない。」と言って、ただ酒を飲んでいました。

ちょうど隣の席で、休暇中の軍人とおじさんが酒を飲んでいました。話を聞くと息子と父のようです。息子はタバコを吸いながら（注：韓国では親の前でタバコを吸うのは無礼）「おめえのせいだよ。おめえが悪いから、こんな風になっちまったんだろ」みたいな感じで罵っていました。お父さんのほうは穏やかに「分かった、分かった。飲め、飲め」と言っています。息子の軍人は、酔っぱらっているわけではなさそうなのですが、とにかく怒りに燃えていて、店員を呼んではその店員に文句を言ったりしているのです。お父さんは小声で「恥ずかしいから、もう少し小さな声で。ほかの人が見て恥ずかしいから、小さな声で…」息子はそんなことを言われてもずっと「なんだあ、この野郎！」と荒々しい感じです。そうするうち、お父さんがとつぜんパーンと息子の頬を打ちました。息子は一瞬にして、小声で、「すみませんでした…」となりました。私は、息子がテーブルをひっくり返しでもするのかと思ったのですが、急にしおらしくなったのです。それでまた二人は飲み始めました。まただんだん息子の声が大きくなります。お父さんは「まあまあ、静かに静かに…」、息子は「わあわあわあ！」お父さんがパーン！これをずっと繰り返すのです。なんだこれ？と思いました。男女ふたりのストーカー問題のために飲み屋に来たのですが、私の関心はその父子にすっかり惹きつけられてしまいました。そして「これが演劇だ」と思いました。目に見えない愛情関係があります。息子は父に対する堪え難い怒りがあり、しかし父に頬をはられるとすぐに静かになる、その心情。見たところ、息子は軍隊に行き、休暇中に実家に戻っている。父親はどうやら母親と離婚している様子。その二人が繰り広げる、言葉で説明が難しい、グロテスクな、愛情が渦巻いている関係。この関係はいったい何なのだろう？この光景が私の中に残り、それが『青春礼讃』に反映されています。

もう1つ、この作品のきっかけになったのは、ある俳優です。『青春礼讃』の初演には鄭義信さんの 『焼肉ドラゴン』の母役もやったコ・スヒが出ていますが、彼女は当時、二十歳ぐらいでした。同じく出演したパク・ヘイルは同級生です。

ある人から芝居を作らないかと誘われて、それで何をしよう？となったときに、自分のまわりには 19 才、20 才といった若い俳優がいっぱいいて、それで青少年の話にしようかと思いました。でも当時の青少年の出てくる既存の芝居は、学校でやんちゃをやって家族や社会からはぐれものになったけれども、最後は更生して、いい勉強をしました、これからがんばります…というものばかりだなと、私は感じていました。

私は「実際にそんな話があるか？」と思っていました。一度グレた青少年が家族や先生の話を聞いて更生するとか、自分の周りでは見たことがない。誰かに「そんなふうにしちゃダメだ。正しく生きなさい」といわれて「はい、分かりました。これから正しく生きます」そんな子供がいたら、それは問題だと思います。人間が成長する間には、ある時は正しい道から外れたりすることも必要です。

それで、一緒に芝居を作ることになった俳優たちに、どんな人生を生きてきたかひとりひとり聞きました。

■ユン・ジェムンのこと

この時に父親役だったのがユン・ジェムンという俳優です。彼は映画などでも活躍する有名な俳優になりましたが、先日、飲酒運転でつかまってさらに有名になりました。

私がこれまで出会った中では最高の俳優です。

あるとき私は稽古場の端に座り、ラーメンを食べて焼酎を飲んでいました。するとある俳優が来て「そのラーメン、ちょっともらえますか？」「ああいいよ」ということで彼はラーメンのつゆを飲みました。「焼酎もちょっといいですか？」「ああいいよ」それがユン・ジェムンでした。それで別の人に「あの俳優は誰？」と聞いたら、「うちの劇団をクビになったやつです。クビになったから来てはいけないはずなのに、毎日来てるんです」劇団代表がいるときは来ないのです。代表がいないときをねらってやって来て、ずっと稽古場にいる。

「海で誰かを待つ」という場面を即興をやってみようということになったとき、ほかの俳優たちはこんな感じだったのですが（海に向かって必死に手をふる）、ユン・ジェムンがとつぜん出てきてこうやったのです（ポケットに手を入れたまま、しばらく海のほうを見て、それから「チェッ」と言って去る）。私は「お前がいちばんうま

い」と言いました。それでユン・ジェムンをキャスティングしたのです。ユン・ジェムンをクビにした劇団の仕事でユン・ジェムンを採用したのです。

その劇団の主宰はもともと酒を飲まない人なのですが、私に「ちょっとお酒を飲みに行きますか」と誘ってきました。そして、「あいつは劇団員ではないのでキャスティングされては困る」と言われました。「でも気に入ったんです」「しかし劇団の仕事だからやめてください」

それでユン・ジェムンに「じゃあ、俺とやるか？」と言って、劇団を離れて、私のメンバーで作ったのが『青春礼讃』です。

■パク・クニョンの演出方法論

私は特別な演出メソッドを持っているわけではありません。思いついて、俳優に「こうやってみて。」と言い、それでいろいろ試していい結果が出たものが作品になります。

俳優はだいたい演出家に対して「ここはどうしましょう？」と尋ねてくるものですが、私と一緒にやっているメンバーはみんな自分たちで作ってきます。ですから稽古場で稽古が行き詰ったとき、どうしたらいいのか私は分かりません。それで「お前たちでなんとかしてくれ」といって放っておくと、次の日に素晴らしくなってくるのです。

『青春礼讃』には、「てんかん」という役の女性が出て来ます。これは私が教会に通っていたとき、そこでとてもガッチリした体格の女性が発作を起こしたことがあったのです。その経験から出来た役です。初演では、やはりガッチリした体格のコ・スヒが演じました。てんかんになる人はガッチリした体格の人が多いのです。コ・スヒも小さい頃に発作が出たことがあったらしいとのことでした。それで彼女は記憶をたどる作業をしました。私からはドストエフスキーの『白痴』を読んでみなさいとアドバイスしました。その後の再演ではこの役をイ・ボンミョンという女優がやりましたので、その時は脚を引きずった、びっこの女性にしました。どこか体に障害をもっていることにしたかったのです。

舞台美術にかけるお金がなかったので、美術はとてもシンプルでした。階段状になった客席に対して、舞台も同じ傾斜で向かい合う階段にしたのです。これは、あとでインタビューに答えるときに思いついた説明なのですが、客席と舞台が鏡のような関係で、観客に「あなたの青春はどうですか？」と舞台から逆に問いかけるような、観客が自分で自分の青春を見ているような…そんな効果を狙ったと説明しています。でもこれは、あとづけの理由です。

『青春礼讃』というのは、もともと韓国ではよく使われるフレーズで、教科書などにも出てくるほどです。青春の美しいスピリットを讃える有名な言葉です。それをタイトルにしました。しかし内容はタイトルの反対で暗澹とした青少年の心情、その周辺の家族をえがいたものです。でも、そんな人生にも価値はあり、すべての人生に価値はあると。小さいけれども、そういう希望をえがいた作品です。

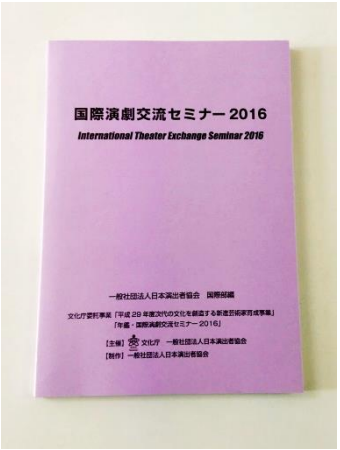
『青春礼讃』について、あとひとこと言うとすると……自分の口から言うのは恥ずかしいのですが、これは評論家が言ったことです……この『青春礼讃』という作品を通して韓国演劇が変わったと言われました。

その評価の中には否定的な側面もあり、『青春礼讃』以後、どんな瑣末な、私的なことでも演劇に出来るという認識が広がり、内容が支離滅裂になってしまった。テレビドラマのような安易な作品が増えたということも言われました。（『青春礼讃』は戯曲自体はシンプルでわかりやすいので）「何でも演劇にして良いのだ」「これぐらいなら自分にも書ける！」と思って書く人々が増えました。私自身は、ひとつのセリフを書くときにも、自分の中で何度も繰り返して考えて作っているのですが。（そのあたりの工夫は、なかなか見えにくい。）

続き、詳細は、国際演劇交流セミナー2016年鑑にて

国際演劇交流セミナー2016

——— 年 鑑 ———



■ 目 次 Index ■

メ キ シ コ　特集 – リーディング・レクチャー・シンポジウム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
アフガニスタン特集 – ワークショップ・リーディング ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
韓　　国　特集 – ワークショップ・レクチャー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
マ カ オ　特集 – ワークショップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
ウェールズ　特集 – ワークショップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
イ ギ リ ス　特集 – ワークショップ・レクチャー ・・・・ ・・・・・・・・・・・・・・153
国際演劇交流セミナー実施年表【1999年～2016年】・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 214

■ ご希望の方は、日本演出者協会 事務局までご連絡ください。

TEL:03-5909-3074 ／FAX:03-5909-3075 ／ E-mail: j_d_a_info@yahoo.co.jp